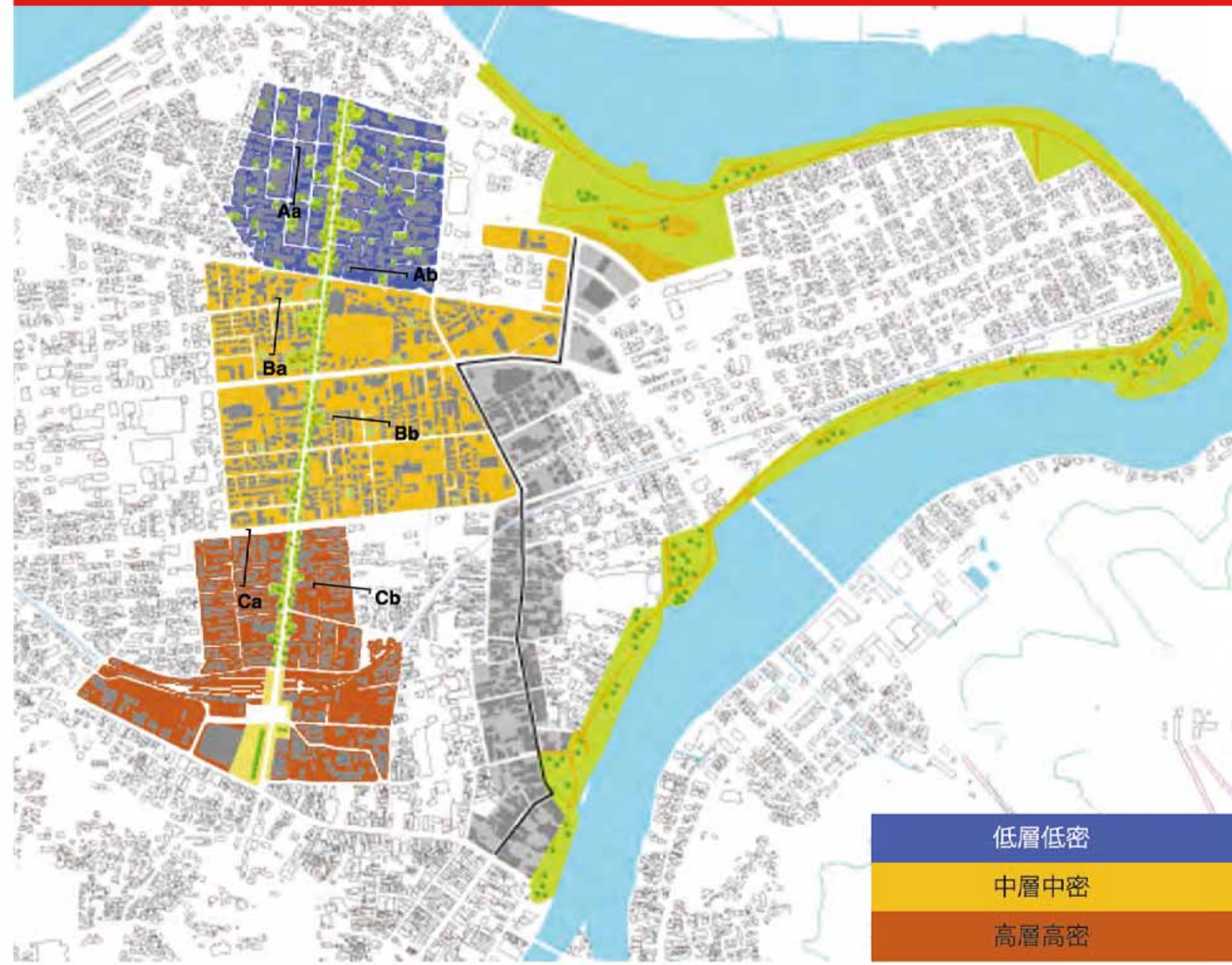
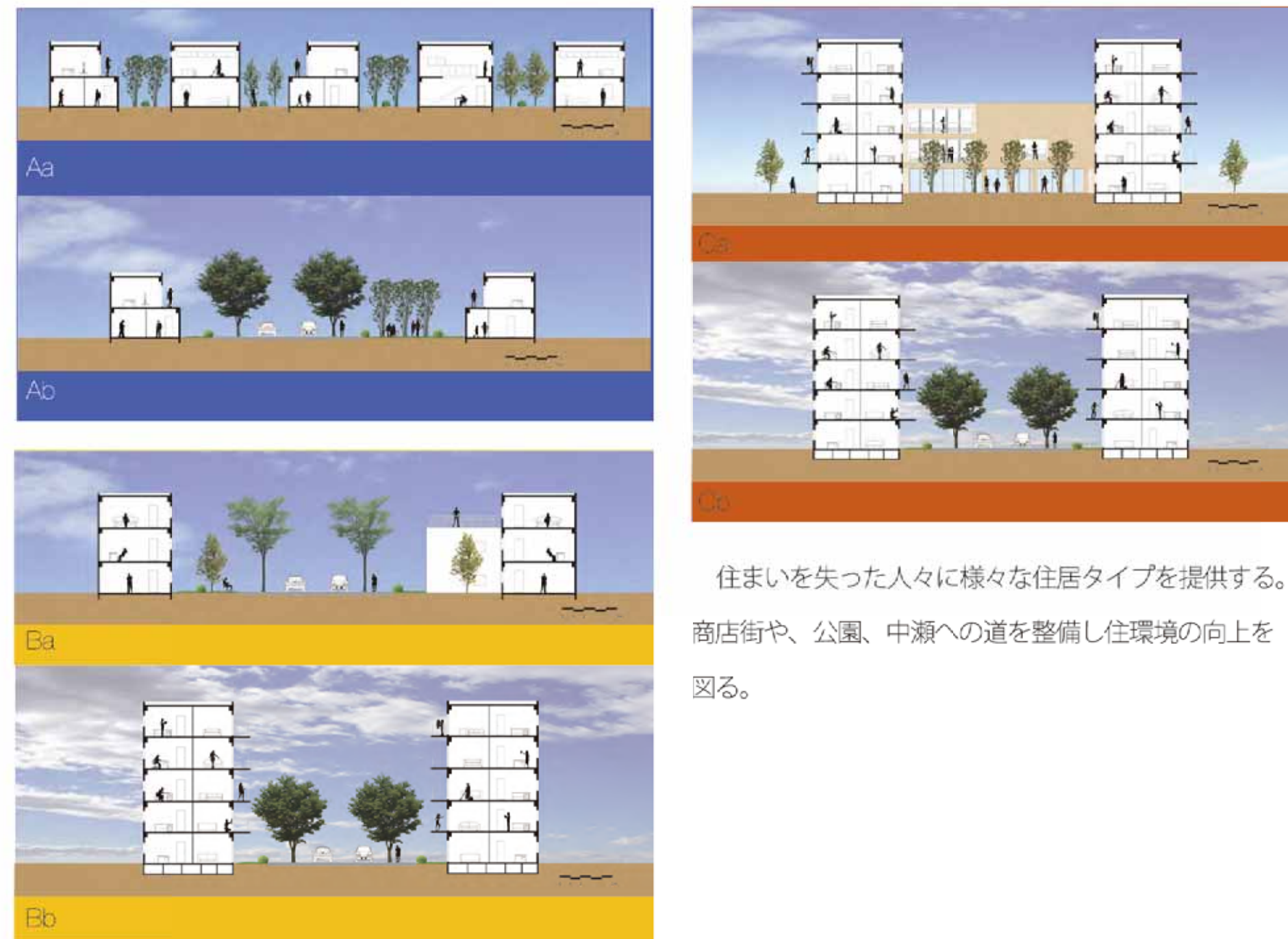


A: 市街地



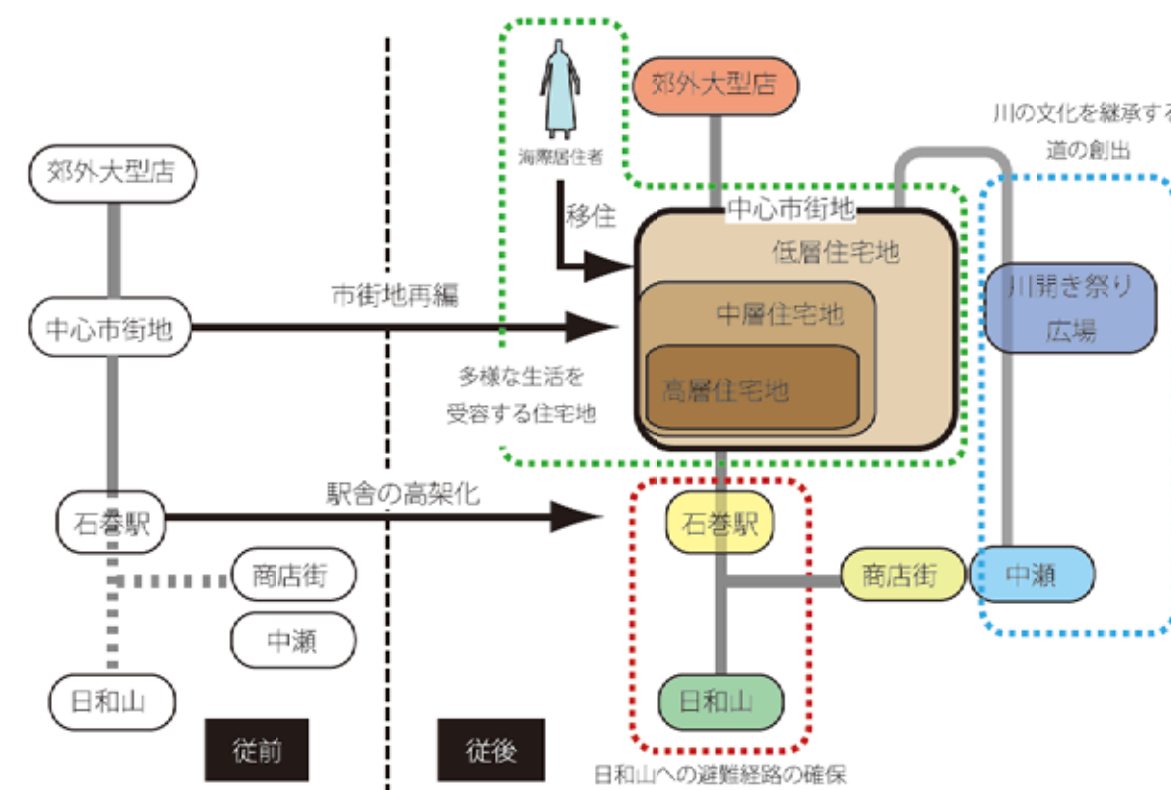
市街地は、津波で住まいを失った人々の受け皿となる。消費的・文化的な空間へのアクセスを整備することで、魅力的な居住空間を実現し、震災によって他都市へと分散しかねない地域コミュニティを留まらせる。

SECTION

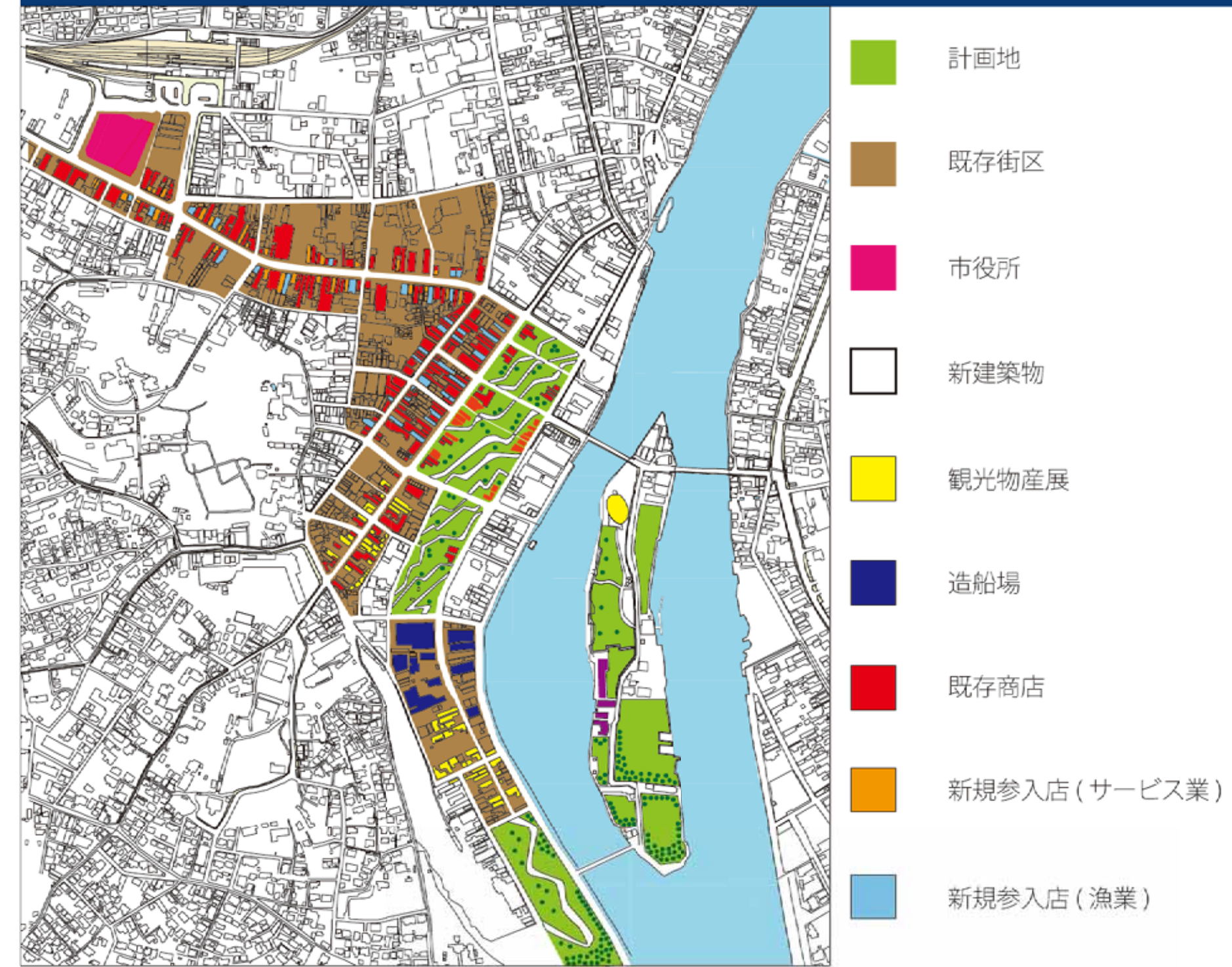


住まいを失った人々に様々な居住タイプを提供する。商店街や、公園、中瀬への道を整備し住環境の向上を図る。

DIAGRAM



B: 生活産業拠点



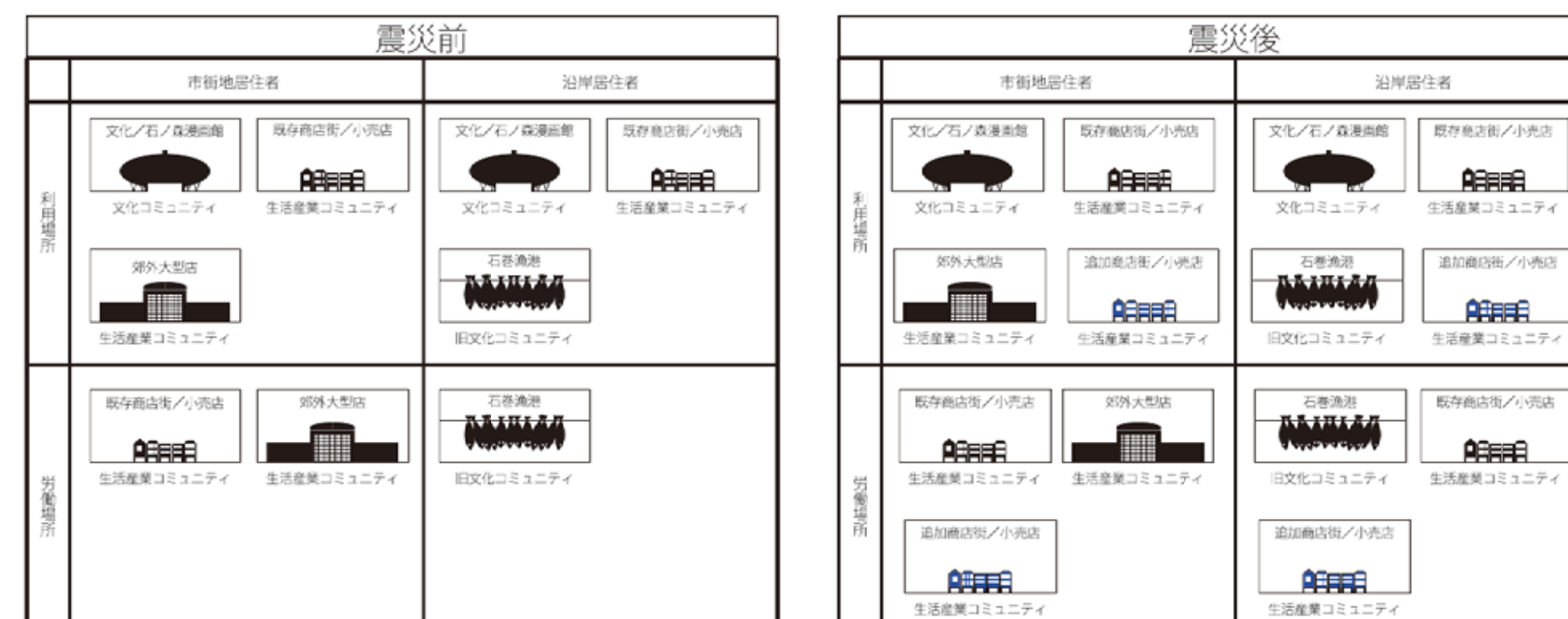
生活産業拠点は、海際居住者の雇用の確保を担保する場所として、既存の商店街の活性化を図る。この商店街は、地域特性を活かした産業・消費活動が可能となり、既存コミュニティを織り交ぜた新たなコミュニティの場となる。

PERSPECTIVE

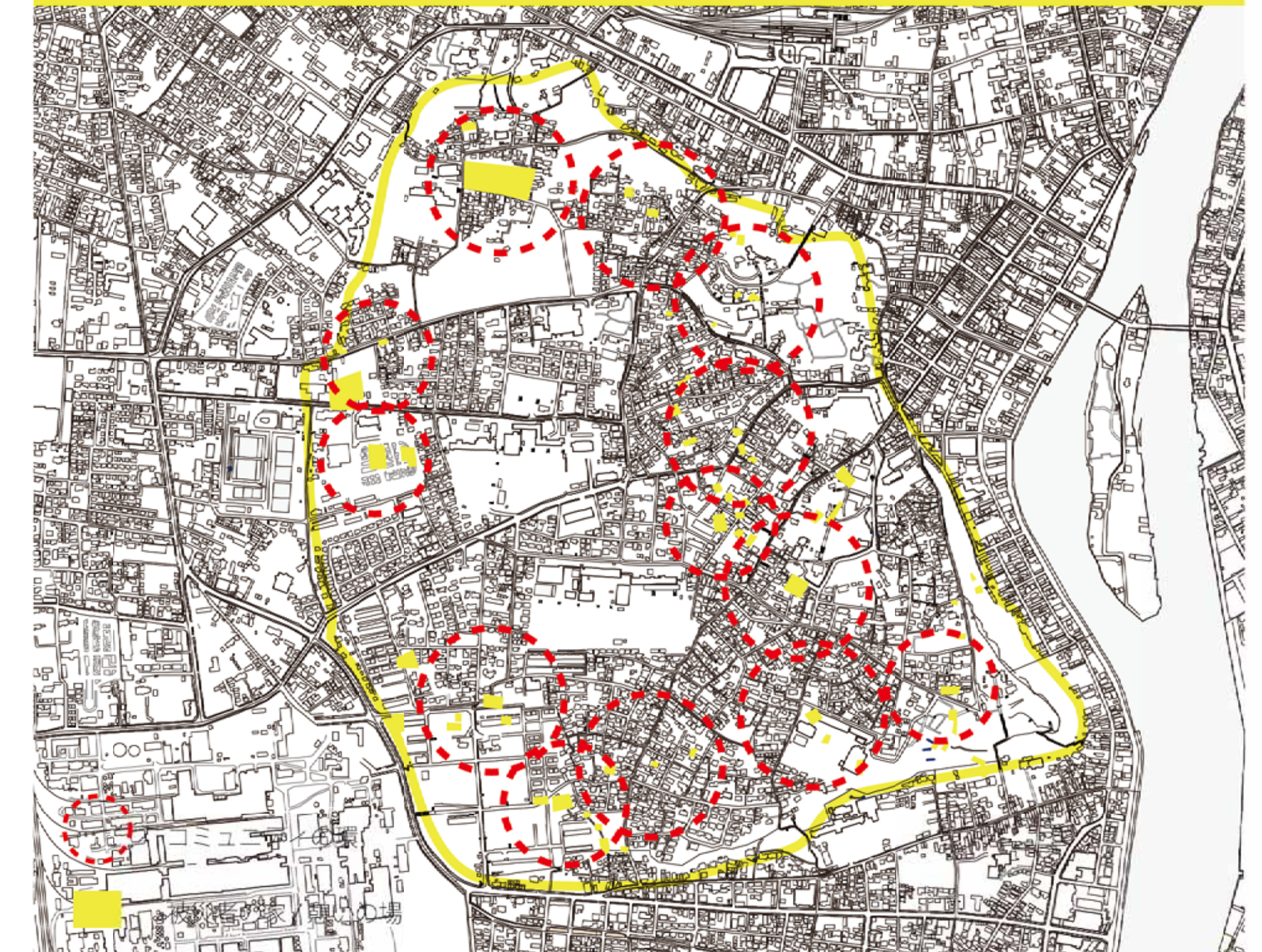


商店街の隣に市場をつくりました。山田さんがとってきた魚は、市場の佐野さんを通して商店街のお寿司屋さんで食べられます。この場所に集まる人々は、商店街のすぐ横にある石ノ森美術館で地域の文化を感じます。

DIAGRAM

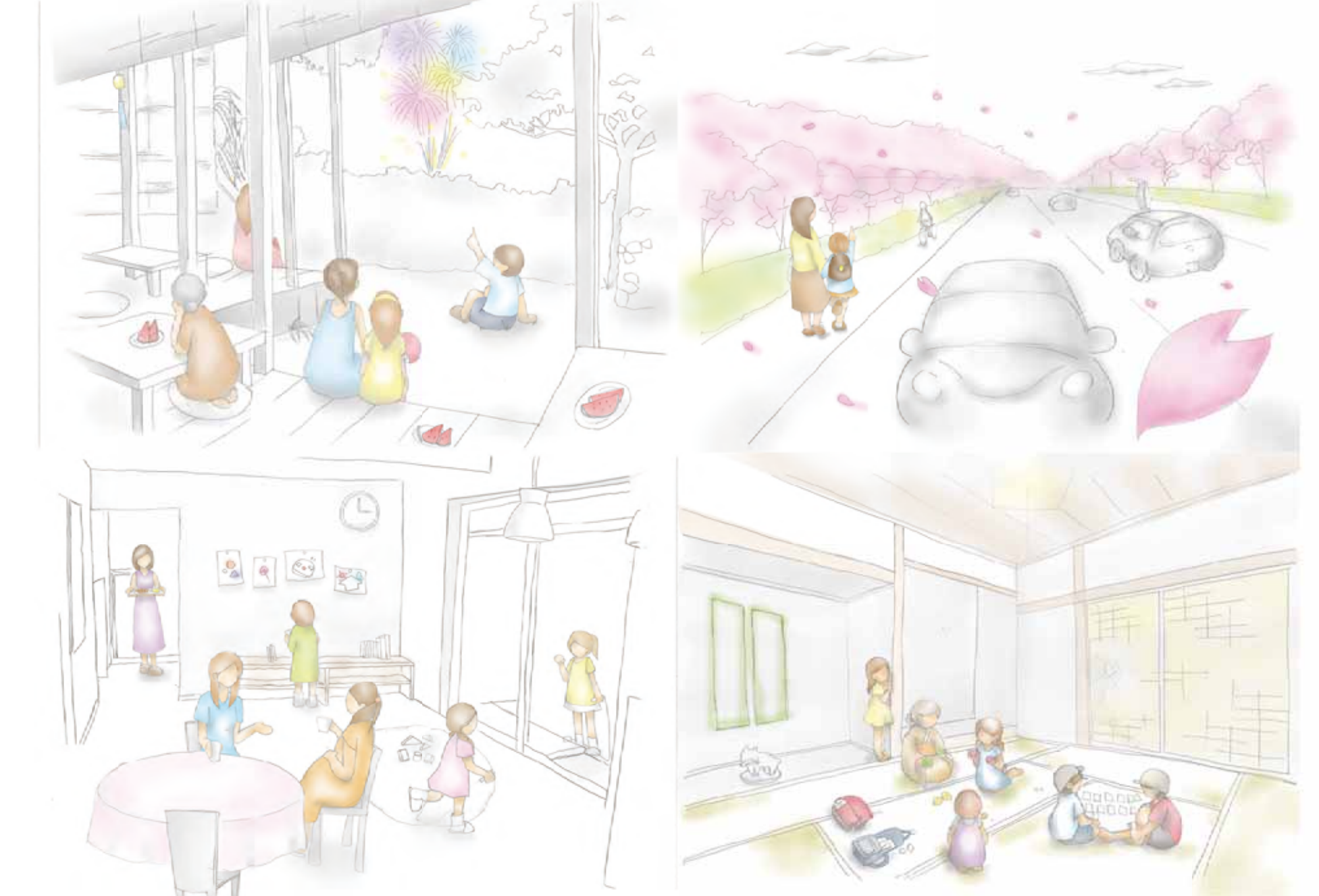


C: 日和山



防災のシンボルである日和山は、地域の精神的な拠り所となる。日和山公園・神社仏閣の空間を壊さないことを前提とした、ストックを活用した居住空間の確保を行い、新たなコミュニティが形成され活動する空間としてサロンを併設する。

PERSPECTIVE



自慢の桜並木は緊急時の避難路になります。定期的開放されるサロンとして、田中さんのお家では夏、花火を楽しめて、佐藤さんのお家は井戸端会議が出来るけど、子供達もいるから安心。鈴木のおばあちゃんのお家には子供達が学校帰りに家に遊びに来ます。

DIAGRAM

